

舞台作品共同制作の試み
《CLAPPING!》

— Sequences for Two Forms of Percussion —

石 黒 晶

Summary

An Experiment in Collaboration in Performing Arts
CLAPPING!
— Sequences for Two Forms of Percussion —

ISHIGURO Sayaka

CLAPPING! was composed for the occasion of the 100th anniversary of the inauguration of the Music Department of Kobe College and had its first performance as the opening piece of the concert that was held to celebrate the establishment of the Department's Dance Course. It is a collaborative piece involving both music and dance, to reflect the collaborative nature of music-making and education.

The creation of CLAPPING! has been a very exciting and thrilling experience for all concerned. As may perhaps be expected with such an innovative and experimental piece, there have been unexpected new discoveries, and of course a great deal of trial and error.

I think I can say that the production has proved to be an occasion for deep joy and new insight for the students involved and, looking back, I believe the exercise has been of real significance as university education. In addition, I myself discovered anew that music is an inexhaustible stimulus to the imagination, inspiring choreographers to scale new heights of visual and physical beauty.

はじめに

《CLAPPING!》は、2005年11月30日に芦屋ルナ・ホールで開催された神戸女学院大学音楽学部開設100周年記念、舞踊専攻開設記念公演オープニングのために、本学音楽学科舞踊専攻の島崎徹教授の依頼によって書いた作品である。

そしてこれは、作曲者と島崎教授、そして共演した25名の学生と舞台関係スタッフらによるコラボレーションでもある。そこには音楽と音響、そして舞踊的・視覚的な表現がある。

作品そのものについては後に示す楽譜およびVideo DVDで概容がわかるであろうが、上演までの経緯については当事者しか知りえない部分もある。この度の制作は、これにかかわった学生と教員にとって今までにないスリリングでエキサイティングな実践体験であり、じっさい出演者みんなの記憶に残るような出来事だったのだ。《CLAPPING!》は、単発イベントで終わるには惜しい、ささやかではあるが音楽学科の舞台制作の新たな試みであり、また芸術分野の教育活動の新しい可能性を示唆するものであったと思う。

本稿では《CLAPPING!》制作の経緯を記録にとどめつつ、この作品に関わった学生と教員にとってなぜこれが今までにない体験になったのか、いささか考察を加えたい。また作品分析と解説を記し、最後に楽譜を付したい。

1 《CLAPPING!》制作の経緯

1・1 制作のきっかけ

2005年の音楽学部夏期講習、舞踊専攻のリズム・ソルフェージュ授業でのことである。

授業で用いた多声部リズム教材を練習した後、そのリズム効果から石黒が連想し受講生に話したインドネシア、バリ島の“ケチャ・ダンス”のイメージが、偶々授業を見学していた島崎教授を思いがけなく触発することとなった。彼はそのとき新しい舞台作品のファンタジーを抱き、それが秋の記念公演の企画会議におけるオープニング制作の提案へとつながっていったのである。

1・2 制作プロセス

《CLAPPING!》の作曲期間は10月末から約5日間、そして11月2日の関係者初顔合わせから30日の本番までに計9回の練習とリハーサルを行った。

それに先立って島崎教授のファンタジーを具現化するべく出演者を募り、楽器編成を選定した。その結果4年生9名、3年生10名、2年生2名、1年生4名、計25名の音楽学科学生（専攻の内訳はピアノ11名、オルガン1名、フルート1名、打楽器3名、声楽9名）の参加を得、使用楽器についてはルナ・ホールのデッドな音響特性を考慮し、膜質および金属打楽器を用いることにした。

音楽担当の石黒がまず作曲し、それを練習にかけてそこで島崎教授や学生の助言をいれながら仕上げていき、3回の練習で音楽の一応の形が定まった。その後に、島崎教授が音楽学生に可能な範囲での振付を加えていった。さらに本番前々日に舞台スタッフが練習に加わり、照明ほかの打ち合わせをした。公演当日にはホールにおいて、時間の許す範囲で最後の仕上げを行った。

今回思いがけなかったのは、舞踊分野では本番までの練習回数が音楽分野に比べてかなり多いことである。当初3回程度で予定していた練習回数が徐々に増えたことは、音楽専攻学生にはとまどいがあっただろう。しかし皆よく協力し最後まで脱落者は出ず、参加者全員で本番を終えることができたのは幸いであった。

1・3 練習の環境

練習場には音楽館ホールとミリアム館を使用し、練習時間は授業終了後に設定し毎回約2時間行った。その結果練習総時間は凡そ18時間におよび、これは本学の半期授業総時間に匹敵する。(公演当日のリハーサルと本番の所要時間を含めていない。)

教員にとっては毎回の練習場の確保と楽器手配が、また学生にとっては授業終了後の2時間の拘束と楽器運搬が負担となった。またこのような舞台作品上演の際には、会場リハーサルが当日ゲネプロのほか前日から最低2日は必要であることを、今回現場で感じた。

1・4 教育的意義

この制作プロセスで印象的であった事のひとつは、学生の積極的な参加姿勢である。それは通常の授業においてともすればありがちな受身の態度ではない、学生の目の輝きがまるで違ふと感じた。

それを象徴するような思い出がある。

当初のとまどいから脱した練習4回目の頃であった。楽譜のリハーサル記号□の部分に関して、である。練習に熱の入った石黒はこの膝打ちリズムを毎回繰り返すうち、両大腿部前面を大きく内出血してしまっていた。自分の年齢を思い知らされた気がして練習中にそれを学生に話したところ、帰り道すがら彼女たちは、

「先生、わたしらもなってますー」

とニコニコしながら言うのである。

別の学生からも同じような話を聞かされた。授業の合間に彼女らはスカートをめくり上げて、青にえの大腿部を(参加者の勲章のように)見せびらかし合っていたそうである。

神戸女学院の音楽専攻の若い学生が大学教育になにを求めているのか、この時いささか考えさせられる気がした。そして先行きの見えないこの公演への明るい見通しを、この時初めて感じたことを覚えている。

学生から徐々に「楽しい」「面白い」などの感想が、直接あるいは間接的にわれわれの耳に入ってくるようになった。また参加者の間である種の連帯意識が生まれはじめた。

通常の授業にはなく、この活動に存在したものはいったい何だったのだろうか。

おそらく、異分野の教員同士がインスパイアし合いつつすすむ共同制作に、同時進行の形で参加し練習するという“臨場感”が、学生たちにとって新鮮だったのではないだろうか。特に今回は本学における音楽と舞踊の初顔合わせであった。教員たちが互いに試行錯誤しながら新作を一緒に創っていくプロセスに彼女らが立会い、また自分たちもいま創造行為にかかわっているという実感が、いつにない積極性となってあらわれたのだろう。

「音楽ってやっぱり楽しい…」という意外な言葉も、学生の口から漏れてきたのである。

公演が終わってそんないろいろなことが思い出されるうちに、彼女たちの味わった充足感がようやくわれわれにも理解できるようになってきた。

一言で言えば、学生たちも“生の感動”を求めていたのだ。

今回の学生の反応を見ていると、このような舞台制作においても教育的意義は十分存すると思う。いろいろと困難な問題もあろうが、今後音楽学科のワーク・ショップ型の授業として、音楽と舞踊のコラボレーション制作を継続していくことは可能であろう。

2 《CLAPPING!》作品分析

2・1 作曲にあたって

上述したように《CLAPPING!》は記念公演オープニング作品であるので、上演時間は5分乃至8分という依頼であった。しかし実際の上演時間は11分となった。

依頼者から与えられたヒントは、

「怪しげな集団が」

「薄暗い客席で立ち上がり」

「強烈なリズムを打つ」

「ケチャのような」

という風な言葉で表現された、断片的であるが舞台的なイメージ喚起力の強いものだったと記憶している。当然、舞台および客席での出演者の所作や照明その他の視覚的な効果が大きな要素となるので、音楽はできるだけシンプルに、また即興的要素を含んだものがおもしろいと思った。

しかし即興性というのは両刃の剣で、パフォーマンスの出来不出来の幅が大きくなる。今回のように出演者に学生を想定した場合、即興があまりに勝ちすぎるのは危険と考えた。そこで前半（楽譜のリハーサル記号㊦から㊧まで）を即興的要素の多い部分とし、後半（同リハーサル記号㊨から最後まで）を通常の定量記譜による部分とし、作曲スタイルを使い分けることにした。

楽器（音響素材）は手近なもので、また演奏が比較的容易であるという条件から、以下を選んだ。

楽器編成：

各種打楽器

Rain Machine, Bell Chime, Triangle, 2Maracas, Agogo, Claves,
2Bongos (2組), 2Congas, 2Tom-toms, 2Cowbells, Bass Drum
鳥笛、鈴※、印鑿※ (※は仏具)

その他の効果音と小道具

手拍子、足拍子、膝打ち、口笛、新聞紙をよじる音、フォークやスプーン

人声

2・2 構成

全体は5つの短い部分に分かれ、さらにそれぞれは以下のように分けられる。

第1部分 〈Loop1〉〈Loop2〉〈Loop3〉

- Ⓐ Director と Clappers のリズムの掛け合い1
- Ⓑ Director と Clappers のリズムの掛け合い2
- Ⓒ Choreographer と Clappers のリズム・ゲーム

第2部分 〈Sound Effects〉

- Ⓓ 口笛と新聞紙による風のざわめき
Percussionists による水音や宇宙の響きや鳥のさえずり
再び風のざわめきと鳥のさえずり

第3部分 〈Melody1〉〈Melody2〉

- Ⓔ Clappers によるエキゾチックな歌1
- Ⓕ Clappers によるエキゾチックな歌2

第4部分 〈Clap Kechak〉

- ⒼからⒽ アジア風な夜のケチャ

第5部分 〈Loop4〉〈Kitchen Kechak〉〈Coda〉

- ⒾからⓁ Percussionists のラテン的なリズムと Clappers の“手の踊り”
- Ⓜ Clappers によるフォークやスプーンの明るいケチャ
- ⓃからⓄ リズム・トゥッティとエキゾチックな歌2の回想

2・3 各部分について

各部について、楽譜のリハーサル記号を示してト書きを引用しながらさらに説明を加える。
できれば映像を観ながら、演出記録として読んでいただければ幸いです。

第1部分

- Ⓐ ~会場内が真っ暗な中、客席最前列にすわっている Director が〈Loop1〉の手拍子リズムを打ち始める。客席に分かれて座っている Clappers がこれに続く。~

公演オープニング、観衆はまだプログラムの始まりとわからない。だから手拍子に加わってくる人もいる。それもまた、観衆を舞台に引き込んでいくための演出の一部なのである。

㊦ ～最前列中央の Director にスポットライトがあたると、今度は〈Loop2〉のリズムを打ち始める。同じく Clappers がこれに続くが、すぐに上手側と下手側に分かれて〈Loop 1〉と〈Loop2〉の掛け合いになる。…cut off で暗転する。～

ここではじめて照明がつく。立ち上がった男は、薄汚いコートを身にまとってハンチングを斜めにかぶり、何やら怪しげでその動作はエキセントリックである。観衆は、ようやくこれが最初の出し物であることに気づくのである。

㊧ ～舞台上手に腰かけた Choreographer にスポットライトがあたる。〈Loop3〉を始めると Clappers が立ち上がり、Choreographer に続く。…Choreographer の合図に Clappers が反応して、まるでゲームのように進む。…cut off で暗転。～



写真1 舞台上に腰かけた Choreographer が、客席に分かれている Clappers に合図を送るリズム・ゲーム。

Choreographer は、きびきびした動作で〈Loop3〉の流れを仕切る。このリズム・ゲームには自然な即興性があり、観衆も知らず知らずのうちに一体感を持っていく。

～全員の自由な口笛で〈Sound Effects〉につなぐ。～

第2部分

㊨ ～Clappers が〈Sound Effects〉をはじめ。舞台上の Rain Machine にスポットが当たり、さらに他の Percussionists にも照明が当たっていく。…場内にはさまざまな音響が静かに響く。～

暗転したらすぐに口笛が場内に響く。そして Clappers の新聞紙をよじる音は、風のような響きを立てる。Choreographer が持つマイクは意味ありげに Rain Machine に向けられる。



写真2 Rain Machine が静かに水音を奏する。マイクを持つのは Choreographer 島崎。

場内には風の音や水音、宇宙的な音、鳥のさえずりなどが響く。

ここは音楽というより音響の部分である。観衆のイメージーションを刺激する部分かもしれない。

第3部分

㊦ ~Clapper の一人が、g 音で「アー」と声を発する。…〈Melody1〉をまず一人が歌い出すと、全員がすぐそれに唱和してユニゾンになる。次は、Director の cue によって各々少しずつずれて入り、全体がエコーのように重なり響くように歌い合う。～

ふたたび客席最前列の Director にスポットが当たる。Director が Clappers の合唱を導くが、その動きは普通の指揮のようではない。やはり何か怪しげな所作である。

この部分の歌詞「アヴァラム」は、南インドのタミル語の“Avalam”（日本語の「あはれ」に対応するとされる）という語を用いた。この“Avalam”は「悲哀の情」「共感の情」を表すという。（大野晋著『日本語の起源 新版』岩波新書 p. 203）

ここでは、音階第3音に微分音を使った長短調の曖昧な8分の6および2分の2拍子の旋律にこの言葉をのせ、何度も繰り返して歌っている。観衆には、中央アジア風のエキゾチックな歌のようにも聴こえるであろう。

Ⓕ ～〈Melody1〉が終わると、次は〈Melody2〉も同じように歌う。～

第4部分

Ⓖ ～歌の最後のフェルマータにかぶって、Agogoの不思議な雰囲気を出すリズムが入ってくる。…その後、DirectorのClavesがcueとなって、突然Clappersによる〈Clap Kechak〉が始まる。～



写真3 〈Clap Kechak〉のDirector石黒

このAgogoはいささかジャワ的な響きを出し出す。Agogoは元来ラテン系の楽器であるが、これを通常奏法ではなく柔らかいフェルトの撥で打つため、何かガムランのような響きが生み出されるのである。続いて、客席で4パートに分かれるClappersによる手拍子ケチャが始まる。打楽器も加わってガムラン的色彩を添える。

Ⓖ ～〈Melody2〉をClappersやPercussionistsがリズムを打ちながら歌う。～

さらにガムラン・ケチャに、〈Melody2〉のエキゾチックな歌が重なる。繰り返した後にcut offで暗転する。

第5部分

Ⓖ ～舞台のPercussionistsに照明があたるやいなや、〈Loop4〉が始まる。～

突然舞台全体が明るくなり、Percussionistsが奏し始めると音楽もこれまでと一変する。〈Loop4〉はラテン系打楽器群による、明るく激しいリズムである。



写真4 ラテン的なリズムの〈Loop4〉を奏する舞台上の Percussionists。左から別所 (Cowbells)、金鹿 (Bongos)、橋本 (Congas)、田中 (Bongos)、有澤 (Tom-toms)。

㊦ ~Director は舞台に移動し Clappers はそれぞれ客席から舞台前に進んでくる。~

そして Clappers は横一列に並び、すぐに中央に集まって輪になる。



写真5、6、7 Clappers の“手の踊り”。本番では真っ暗な中、照明によって手だけが浮かび上がる。

舞台上の上手下手から照らされた照明によって浮かび上がった Clappers の“手の踊り”が始まる。ユニークでとても面白い、視覚効果のある振付である。

㊦ ～Clappers は順番に舞台に腰かけていく。～

そしてケチャのリズムを、今度はてんでに持ったオモチャのフォークやスプーンで奏する〈Kitchen Kechak〉に変わる。さらに Percussionists の打楽器とともに盛り上がった後、



写真8 20人の Clappers、5人の Percussionists と Director による 〈Kitchen Kechak〉。

㊧ ～Clappers はみんな舞台上中央に集まって輪になる。～

打楽器が強奏し突然消えると同時に、やおら Clappers はコートを肩脱ぎにして客席を見据えながら回想するように〈Melody2〉を歌い、曲は終わる。



写真9 ラストシーン、客席前中央の Clappers。前列左から、海老原、嶋田、藤村、川勝、中央奥の木村、今中、湯浅、赤松、高橋、野元ら。カラフルなシャツがダウンライトで光る。

3 《CLAPPING!》をふりかえって

今回の制作をふりかえって、音楽面で不十分な点は多々ある。

- 音楽的に弱い部分の多いこと
- 視覚的效果に依存しすぎていること
- 構成が生硬であること
- エキゾティシズムが中途半端で、雰囲気以上のものになっていないこと

など挙げればきりがなく、振付家からの要求に応え得なかった点は、さらに多いであろう。しかしそれでもなお、この共同制作がわれわれ音楽学科にとって意義深いものであったと私は信じている。

関係者の尽力によって公演は立ち見が出るほどの盛会となり、満員の観衆の熱気の中でこの《CLAPPING!》を初演できたことは出演者として忘れがたく、また公演後に多くの方々から頂いたあたたかいお声かけは、作曲者にとって何よりありがたいものであった。

ふりかえってみれば、《CLAPPING!》は舞踊のために作曲した音楽、あるいは音楽に振り付けた舞踊というより、それぞれの専門性から少しばかり解放されたエンタテインメント的側面を持っている。そして、そういう“遊び”の部分が出演者や観衆を面白がらせる結果につながったのだと思っている。音楽は視覚的な訴えかけの力を直接には持たないが、振付家を触発して舞踊の美を生み出し得るファンタジーを豊かに蔵していることがわかったし、また振付家は、演奏家が楽器を演奏する動きにさえも身体的な美を見だし得ることを知った。

これを契機として、次は本格的な舞踊音楽の作曲にも取り組んでみたいし、その折には今回の《CLAPPING!》制作がきっと貴重な経験として生かせるであろう。

最後に、島崎教授と共演してくれた25名の学生の皆さん、これを認め支えて下さった音楽学部、また舞台写真をご提供下さった宗石佳子さん（本学総合文化学科2005年度卒業生、写真部）と本学入学センター・企画広報室の荒木初広課長、記譜上のご助言を下された本学音楽学科中村健教授はじめ関係の方々への感謝の気持ちを記し、「Making of CLAPPING!」とも呼ぶべきこの小稿を終えたいと思う。

写真撮影（公演当日リハーサル光景）：

宗石佳子（写真1、2、4） 荒木初広（写真3、5～9）

付記：この記念公演のVideo DVDが2006年4月本学音楽学部で制作された。合わせてご覧いただければ幸いです。

2006年神戸女学院大学音楽学部開設100周年記念

舞踊専攻開設記念公演

オープニング作品

CLAPPING!

— Sequences for Two Forms of Percussion —

初演データ

日時・会場：2005年11月30日 芦屋ルナ・ホール

作曲：石黒 晶

構成・振付：島崎 徹

出演：

Clappers	木村 明（リーダー） 長谷川裕美子 金沢彩子 河本依津湖 南香代子 村山加奈子 赤松亜美 安東菜央 海老原ゆかり 藤村真代 川勝さちこ 嶋田友里恵 高林保子 高橋紗代 湯浅香織 今中百合 山田はるか 小久保玲奈 中村亜彌子 野元千寿子
Percussionists	田中麻衣子（リーダー） 有澤弥生 別所有希 橋本麻衣 金鹿千紘

（以上、2005年度神戸女学院大学音楽学部音楽学科在籍学生）

Choreographer 島崎 徹

Director 石黒 晶

上演時間：約11分